奈文研ニュース

No.35 Dec.2009

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp/

高松塚古墳の墳丘仮整備工事が竣工

飛鳥美人や星宿図、四神等の極彩色壁画で著名な高松塚古墳の石室が壁画の保存修理のために発掘・解体されたことは、記憶に新しいところです。古墳から取り出された壁画は、現在、修理施設内でカビの除去作業等が進められていますが、修理が完了するまでには約10年間を要することが見込まれています。その間、現地では墳丘を1300年前の築造当初の形状に仮整備して壁画修理の完了を待つこととなりました。このほど墳丘の整備工事が竣工し、2009年10月24日より一般に公開されています。

都城発掘調査部では、2004年度から文化庁の委託を受け、高松塚古墳壁画の恒久保存対策事業にかかる発掘調査に従事してきました。2006年度および2007年度に石室解体にともなう発掘調査を実施した後も、本年６月まで引き続き仮整備のための発掘調査を進めてきました。今回の墳丘復元は、こうしたこれまでの一連の調査成果に基づいたものです。

高松塚古墳は７世紀末から８世紀初頭頃に築造された二段築成の円墳で、下段部の直径は23m、上段部の直径は18mあります。0.354mを１大尺とする当時の基準尺では、下段部が65大尺、上段部が50大尺となります。また、北側から南東側にかけて墳丘裾を取り巻くように、幅2.8～４m、深さ0.4mの浅い周溝が検出されました。現地では、こうした調査所見にそって墳丘や周溝を復元しています。ただし、遺構面や土層観察用の畦を保護するために、墳丘には厚さ１mの保護盛土が全面にわたって施され、表面は芝生で覆われています。

さて、実際に現地を訪れて整備された高松塚古墳を眺めると、墳丘の裾や下段テラスが南にむかってやや傾いていることに気づきます。実は、終末期古墳とよばれる７世紀代の古墳は、風水思想に基づいて丘陵の南斜面に築造される場合が多く見られるのです。高松塚古墳と同様に極彩色壁画が描かれたキトラ古墳でも、北側が高く南に傾斜する地をわざわざ選んで墳丘が築かれています。復元整備ではこうした点まで忠実に再現しているのです。

このほか墳丘の南東側には、昨年度の発掘調査で確認された礫（れき）詰めの暗渠（あんきょ）も復元的に示しています。この暗渠は、石室周囲に浸透した雨水を墳丘外へと排水するために墳丘築造以前に予め設置されたものです。整備では、礫の詰まった溝が墳丘裾から顔を出した状態を表現しています。

また、高松塚古墳の墳丘南側には、1975年にコンクリート製２階建ての壁画保存施設が建設され石室解体直前まで稼働してきましたが、この重厚堅牢な施設も仮整備にともない撤去されました。長らく壁画の保存対策や発掘調査・整備工事等により、間近で見学することのできなかった高松塚古墳ですが、こうして親しみやすい姿にリニューアルされました。この機会に、現地に足を運んでみてはいかがでしょうか。　（都城発掘調査部　廣瀬　覚）

仮整備完了後の高松塚古墳（南東から）